

**春特集号****2002年 スノーデントシリーズ 品種選定一覧表****時の話題****地球温暖化防止への
国際的約束**

昨年11月、モロッコのマラケッシュでの第七回地球温暖化防止に関する国際会議で、二酸化炭素やメタンなど温室効果ガスの排出削減を義務付ける詳細ルールが最終合意をみた(最大排出の米国は不参加)。2008年～2012年の5年間の年間平均排出量を1990年比で、日本は6%、EUは8%の削減が求められている。日本政府は、2008年までを国内対策試行期間とし、その対策大綱では、減少分として省エネ2.6%、森林吸収3.7%、排出権取引等で1.8%の計8%、増加分として温室効果の高い代替フロン利用に伴う2%を見込んでいる。前述の排出権取引とは、削減割当量を使い切らず余った場合は、その余り分を他国に売ることができるし、反対に削減目標を達成できない国は、他国より排出権を買って基準を満たすことが可能で、ここに温暖化ビジネスが出現し、英国では2004年、EUでは2005年より排出権取引市場を創設する方針である。

一方、削減目標を減少させられない場合は、環境にやさしいプロジェクトに取り組むことによって、排出権を獲得してこの基準を満た

すことが認められている。

農業・畜産の分野でも、世界のさまざまな地域で取り組まれている排出削減プロジェクトを2つ紹介しよう(ニューズウィーク誌)。

1つ目は、地球にやさしい畜産……牛や羊の暖気には、温室効果ガスのメタンが含まれており、これの発生量を抑える飼料の研究、排せつ物からのエネルギー化、発酵残渣の肥料化等である。

ちなみに、成牛1頭1日当たりの暖気によるメタンの放出量はとりかたにもよるが、全乳牛平均180ℓで、現在、北海道には乳牛が85万頭強飼養されているので、大雑把であるが、掛け算で1日1億5千万ℓのメタンガス放出がある。これは札幌ドームに換算すると10日で1杯分、年間37杯分の勘定になる。

2つ目は、新しい農法の開発……土を耕すと空気中に二酸化炭素が放出される。新しい農法が開発されれば、二酸化炭素の放出量を減らせるかもしれない。

地球温暖化の影響がすでに生命を脅かしていると主張(異常高潮、ハリケーン高頻度発生、サンゴ礁死滅による嵐への防御崩壊、漁獲量の激減等)に真剣に対処し、私たちのこの地球号を、どのようにして守り永續きさせるかが問われている。

(酪農総合研究所 事務局長 高田 博文)